主日礼拝説教「招待券は届いています」予稿

日本基督教団石神井教会　2021年7月18日

【旧約聖書日課】創世記　21章9～21節

9サラは、エジプトの女ハガルがアブラハムとの間に産んだ子が、イサクをからかっているのを見て、10アブラハムに訴えた。

「あの女とあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません。」

11このことはアブラハムを非常に苦しめた。その子も自分の子であったからである。12神はアブラハムに言われた。

「あの子供とあの女のことで苦しまなくてもよい。すべてサラが言うことに聞き従いなさい。あなたの子孫はイサクによって伝えられる。13しかし、あの女の息子も一つの国民の父とする。彼もあなたの子であるからだ。」

14アブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。ハガルは立ち去り、ベエル・シェバの荒れ野をさまよった。15革袋の水が無くなると、彼女は子供を一本の灌木の下に寝かせ、16「わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない」と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ。彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。17神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った。

「ハガルよ、どうしたのか。恐れることはない。神はあそこにいる子供の泣き声を聞かれた。18立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする。」

19神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた。20神がその子と共におられたので、その子は成長し、荒れ野に住んで弓を射る者となった。21彼がパランの荒れ野に住んでいたとき、母は彼のために妻をエジプトの国から迎えた。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　9章19～28節

19ところで、あなたは言うでしょう。「ではなぜ、神はなおも人を責められるのだろうか。だれが神の御心に逆らうことができようか」と。20人よ、神に口答えするとは、あなたは何者か。造られた物が造った者に、「どうしてわたしをこのように造ったのか」と言えるでしょうか。21焼き物師は同じ粘土から、一つを貴いことに用いる器に、一つを貴くないことに用いる器に造る権限があるのではないか。22神はその怒りを示し、その力を知らせようとしておられたが、怒りの器として滅びることになっていた者たちを寛大な心で耐え忍ばれたとすれば、23それも、憐れみの器として栄光を与えようと準備しておられた者たちに、御自分の豊かな栄光をお示しになるためであったとすれば、どうでしょう。24神はわたしたちを憐れみの器として、ユダヤ人からだけでなく、異邦人の中からも召し出してくださいました。25ホセアの書にも、次のように述べられています。

「わたしは、自分の民でない者をわたしの民と呼び、
愛されなかった者を愛された者と呼ぶ。
26『あなたたちは、わたしの民ではない』と言われたその場所で、
彼らは生ける神の子らと呼ばれる。」

27また、イザヤはイスラエルについて、叫んでいます。

「たとえイスラエルの子らの数が海辺の砂のようであっても、残りの者が救われる。
28主は地上において完全に、しかも速やかに、言われたことを行われる。」

【福音書日課】マタイによる福音書　8章5～13節

5さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、6「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。7そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。8すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。9わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」10イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきり言っておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。11言っておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。12だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」13そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

「ただ、ひと言おっしゃってください」【こども説教のために】

主イエスが「山上の説教」を終えて山から降りて来られるのを、大勢の人々が待ち構えていました。その中には、主イエスが山に登られる前のように病気を癒してくださると考えていた人々がいたようです。

麓の港町にある弟子のペトロの家を目指していた主イエス一行が町に入ってくるのを待ち構えていたのは、一人の百人隊長でした。ローマ軍の兵士八十人ほどを束ねる下士官です。その町に駐留するローマ軍団の一員だったのでしょう。もちろん、ユダヤ人ではありません。ところが、彼は、ユダヤ人の主イエスが病気を癒す力をお持ちだとの噂を耳にしたのでしょう。自分の「僕」が病気で苦しんでいることを思いだして、主イエスに癒してもらえるかもしれないと考えたのです。

百人隊長から事情を聴かされた主イエスは、「**わたしが行って、いやしてあげよう**」とおっしゃいましたが、百人隊長は、それを断りました。そして、「**ただ、ひと言おっしゃってください**」と願ったのです。主イエスと会った百人隊長は、主イエスに全幅の信頼を寄せて、自分に命じてくれるようにと申し出たのです。主イエスは、「**帰りなさい。あなたが信じた通りになるように**」と百人隊長におっしゃいました。その御言葉に従ったとき、百人隊長は、自分が信じた通り僕の病気がいやされたことを知ったのです。

「これほどの信仰」

この一年半の感染症騒ぎで、病院通いを控えるようになられた方も少なくないでしょう。幸い、わたしは、病院嫌いということでは決してありませんけれども、ほとんど医者にかかることなく過ごしてきました。それでも、神学校を卒業して初任地で長男が生まれてまだ一歳になる前、突然深夜に不調を訴えて、近所の内科医に往診してもらったことがありました。一年に一度かかるかどうかという医院でしたが、妻が真夜中に電話で相談したところ、年配の医師がすぐに自宅まで来て、診てくださったのです。結局、その医師の判断で救急車を呼んで総合病院に入院することになりましたが、そのときほど医者に感謝したことはなかったと思います。最近は、オンライン診療ということも少なくないようですが、直接対面し、手で触れて診てもらうからこそ、患者は医者を信頼し、治療方針に従うことになるのでしょう。

主イエスは、医者として活動されたわけではなかったのでしょうけれども、実際には医者のように病気の人を癒されることがあったのです。多くの場合、主イエスは自ら病人のところに出向かれ、手で触れて病気をいやされたと、伝えられています。それは、「手当をする」医者の振る舞いそのものであったと言えるでしょう。

その主イエスが、百人隊長の僕のところには出向かれませんでした。百人隊長自身が遠慮したように見えますが、もしかすると主イエスが出向かれることを渋られたのかもしれません。「**わたしが行って、いやしてあげよう**」と訳されている言葉は、取りようによっては、「このわたしが行って、いやすのか？」とおっしゃられているとも解釈できるのです。主イエスは、確かに、ユダヤ人以外の異邦人と接することに積極的ではありませんでした。結局、主イエスは、この百人隊長の「信仰」を絶賛されながら、ご自身で病人のところに出向かれることはされなかったのです。

わたしがこの百人隊長の立場で、主イエスを医者として頼ったのだとしたら、残念ながら、次の機会にはこのような医者を頼ろうとは思わないでしょう。たとえ、この百人隊長の僕のように、結果として病気が治ったとしても、それを往診もしてくれなかった医者のおかげだとは到底考えられないと思うのです。むしろ、自分自身で施した手当てが功を奏したと考えると思います。さもなくば、少しばかり信仰者らしく言えば、自分が熱心に祈り願ったことが良い結果を生んだと考えるかもしれません。

しかし、百人隊長の僕の病気が癒されたのは、彼が自分の僕のためにわざわざ自ら出向いて懇願し祈り願った、その熱心さの故だった、ということなのでしょうか。主イエスが感心されたという彼の「**これほどの信仰**」とは、そのような熱心さのことを指して言われていたのでしょうか。

「帰りなさい」

結局、主イエスは、この百人隊長の僕の病気を癒されていないのかもしれません。少なくとも、御自ら出向き、手を置いて癒すことは、なさいませんでした。では、だれがこの僕の病気を癒したのでしょうか。誤解を恐れずに言えば、主イエスから言葉をいただいた百人隊長が癒した、ということなのではないでしょうか。

そのとき、主イエスは、百人隊長の言葉に耳を傾けていらっしゃいました。「**ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます**」。そう言って続けた「**わたしも権威の下にある者です…**」という言葉に、耳を傾けていらっしゃいました。

マタイ福音書は、「山上の説教」の終わりに、主イエスが「権威ある者としてお教えになった」（7:29）というまとめを置いていました。現代人のわたしたちは、「権威」という言葉を必ずしも肯定的に受けとめないところがあります。主イエスに対しても、わたしたちは、「権威ある方」というイメージよりも、「よき理解者」というようなイメージを持つことが多いかもしれません。

親子関係でも、「親の権威」などというものはもはや死語になりつつあります。もちろん、子が幼少の内は、どんな親にも「親としての権威」があると言えるでしょう。子にとって、頼りうる唯一の大人が「親」であれば、自ずと親は「権威」として存在することになります。けれども、たとえそうであっても、成長すれば、反抗期を迎え、「親の権威」を否定するようになります。社会に出て多くの大人と出会い、「親」とは言え相対化されるので、自動的に「権威」を主張できなくなるのです。ただ、わたし自身の経験から言えば、「子」として「親」の権威を否定した時期を越えて、自らが「子」の「親」になったとき、あらためて自分の「親」に対してある種の「権威」を認められるようになることがあるのかもしれません。自分の「親」がかつて置かれていたのと同じところに自分自身も立たされるようになったとき、「親」の発していた言葉が急に近くに聞こえるようになるのです。

百人隊長は、主イエスの前に進み出て、自分に命じてくださるようにと願いました。一人の人に信頼を寄せて、その人からの言葉を待ったのです。自分が従うに値する正当な立場にある方として、主イエスを信頼したのです。主イエスが、「天の父」のもとから言葉を発せられる方であることを認めて、信頼したのです。彼自身、部下の兵士たちの生き死にを左右する命令を発する立場の人間として生きてきたのです。「天の父」のもとから語る言葉の重みを、主イエスから聞き取ったのでしょう。いいえ、主イエスによって、そう導かれたのです。主を知らず、天の父を知らなかったであろう彼もまた、「天の父の子」となるよう、招かれたのです。